

# 末黒野

すぐらの

1月号 (通巻833号)



# 木の実

小川 玉泉

(名譽主宰)

丘包む風に遅れて降る木の実

川上へ三度跳ぶ鯰眩しめり  
丘包む風に遅れて降る木の実  
閉門を告ぐる魚板や夕紅葉  
木犀の名残の雨となりにけり  
秋夕焼サーファーを呑む波頭  
江ノ電の警笛ならむ夜半の秋

毎月の句会場の一つに  
菊名看護学校隣の菊名コ  
ミュニティハウスがあ  
る。眼の下にはJR横浜  
線が通っており、西には  
町並みが開ける。敷地に  
は檜と檜の喬木がそびえ  
ていて、秋が深まると夥  
しい団栗が坂を転がり、  
懐かしい情景を生んでく  
れる。強い風の後、団栗  
がバラバラと落ちるので、  
が、高みから落ちるので、  
風の後ひと呼吸置いて地  
上に届く音が詩情をそそ  
る。

# 秋の声

只管打坐と道元の碑や冷やかに  
露けししや砲台跡の煉瓦積み  
海光や鳶の高舞ふ花野道  
秋冷の階を仰げり閻魔堂

松本三千夫

観音の胎内仏や身に入みて  
洞門や秋の声聴く石畳  
秋の薔薇背より高く文学館  
漱石宛子規の書簡や爽やかに  
竹林やいつもどこかに秋の声  
身に入むや手摺に点字刻まれて  
灌木を抽んで花芒かな  
書に倦むや檸檬の香り手に包み

# 鴨来たる

黒滝志麻子

(副主宰)

ひと鳴きに揃ふたてがみ秋高し  
大池やさざなみひろげ鴨来たる  
鳥落とす木の実の艶を握りしむ  
顧みる尾根へ霧寄る夕べかな  
荒壁のくづれに吊られ唐辛子  
蜻蛉の飛び交ふ軽さ欲しくあり  
砂をどる多摩源流やななかまど  
榎植の実高々とあり雲の影  
色のなき風や古木に洞あまた  
碇泊のここまで秋の灯取虫  
唐橋に人影動く良夜かな  
花野行く色濃き花に導かれ

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 花野

大橋伊佐子

銀漢の果てに連なる港の灯  
一塊の雲の影ゆく花野かな  
オホーツクの海鳴り高き花野かな  
天に星地に虫声の満ちにけり  
日の丸の旗はよきかな小鳥来る  
薔薇科の木に林檎の実る不思議かな  
桔梗や漱石句碑の帰源院  
安曇野は天まで続く花野かな  
童心にかへる一瞬ばつた追ふ  
十月やときめきて待つ新刊書

## 薄

田中臥石

浜木綿会吟行 真言宗勝覺寺

空海の像へ発止と鴟のこゑ  
秋日洩るる堂や目を剥く四天王  
将門の遺す地名や秋津飛ぶ  
青山の地の海鳴りや枝垂れ萩  
望外に生き得て薄刈りをりぬ  
秋日射す川の一箇所鯉溜り  
鴟猛る一朶の雲の松林  
土砂降りの雨に揺れゐる葉鶏頭  
蟪蛄の構へて虚空抱へけり  
丹田に吸ひ込む青き秋の空



# 秋深し

松田泰子

赤蜻蛉群れゐて音のなき流れ  
新涼の椅子に朝刊匂ひけり  
風は秋伸びはうだいの荒草に  
一步にて深しと思ふ虫の闇  
寝に帰る家が見えたり秋の橋  
力ある眼と会ふ野末稲光  
剪らんとすどの秋草も風情あり  
しみじみと心の闇に鉦叩  
水澄んで負けじと空も澄みにけり  
ひんやりと人の流れを縫ひてゆく

---

# ひぐらし

森清堯

竹籠に山と艶けき秋茄子  
コスモスの一斉に揺れ纏れざる  
畦刈られ稲穂の重さくつきりと  
ひぐらしやなすべきことの手に余り  
触るる人誰しも好きと実紫  
碧天の日差し受け止め稲架襖  
八橋に佇てば四方より秋の声  
女学生の弓持つ車内さはやかに  
虫の音を容れて読みたり昆虫記  
五色沼色なき風のわたりけり

# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



鯊日和

齊藤マキ子

岸蹴つて船出す法被鯊日和  
ぼつた跳ぶ風まかせなる着地点  
秋なすび嫁と呼ばれし昔あり  
虫の夜や道にこぼるる忌中の灯  
刈り伏せの草の匂ひやちちる虫  
生国を問ひつ問はれつ月見酒  
一と鍬に親芋子芋まるび出づ

蒲の絮

菅野日出子

堂裏の水琴窟や式部の実  
蹲踞の水満々と秋海棠  
聴き取れぬ老僧の経乱れ萩  
八ツ橋の桁のきしみや蒲の絮  
身に添はぬ宿のゆかたや鉦叩  
秋鱻のたたきに添へて吟醸酒  
ふるさとを持たぬ侘しさ秋祭

菊日和

堺昌子

山坂のあり処さだかや吾亦紅  
笑み美しき白寿の媪菊日和  
菩提寺の手入れよき庭菊咲かせ  
案山子立つ休耕田や雀くる  
寺山の蟬塚渡る秋の風  
奥の院まで郵便夫秋の蝶  
暮れ六つの日に染まりけり鱗雲



# 青炎集

## 松本三千夫選



横浜 外山節子

汀女忌の忽と殖えたる蜻蛉かな  
あかり消しちちろへ返す闇夜かな  
吹き冷ますことなく茶粥朝寒く

刈田道集めて村の小学校

**クララ連れハイジ居さうな花野かな**

この秋思付き来るままに連れ歩く

横浜 鈴木鞠子

熔岩原の陰るとみるや稲光

文机の俳書散らばる瀬祭忌

共に生くる犬の祝ひや敬老日

ひとつもとも群るるもよろし曼珠沙華

段畑へ疎水豊かや彼岸花

**秋の喜知覧に沈む日の重き**

横浜 松浦哲夫

駅訊かれあの萩曲り道形に  
秋曇ひいき力士の負け続く  
**風道を平らに均し赤とんぼ**

居待月天動説のことをふと

木道の先は池塘や秋の風

秋茄子や小振りなれども形良く

横浜 高橋明

廃校や門に絡まる蔦紅葉

**日の本の菊を着こなし劉備公**

潮騒の届く海女が家屋ちちろ

草むらの真暗闇よりちちろむし

男の子化粧させられ秋祭

一陣の堅さに構へ見張鴨

横 浜 小田嶋野笛

**いつまでも悪女で居たし曼珠沙華**

木犀の香や陵王の夢に醒め  
黒といふ漆の艶や月今宵  
もひとつの月のよるめく運河かな  
空といふ無きもの高し秋の風  
猫と居て余生と思ふ秋の夜

横 浜 鏡 英 子

爽やかに老舗ホテルのランチかな  
秋気澄む雲ふんはりと浅間山

**小屋掛けのほまちの野菜草の花**

湯の匂ふ秋の草津の湯揉み唄  
コスモスの小諸城址や空の青  
木犀や袋小路に香の満てり

横 浜 前 原 マ チ

**亡き友似の露けき人に出合ひけり**

岩陰の小さき魚影や秋の磯  
コスモスや溪流下る舟着き場  
露天湯やひとり賜る今日の月  
登り来て爽気あふるる山湖かな  
高原の波うつ光芒原

横 浜 山 本 茂 子

**庭下駄の鼻緒のしめりそぞろ寒**

夕膳に添ふる一鉢柿なます  
塗り箸をつるりと抜けて衣被  
海峡を越えし秋刀魚の太さかな  
障子洗ふ雨にうたせて省く手間  
秋明菊終の一花を押し花に

横 浜 山 口 郁 子

かくや姫の現はれさうな良夜かな  
**思ひ出をたして味はふ郷の梨**

掲示板秋の催しあふれたり  
街路樹の乾びし音や秋深む  
庭隅の傾ぐ小菊に黄の注しぬ  
木犀の風吹く路地へ遠まはり

横 浜 芝 田 幸 恵

宵闇やほのかに点る庭園灯

野分去り七里ヶ浜の五百重浪  
雑念を一気に掃れりところろ汁

**針持つ手ときには止まる秋思かな**

虫の音を聞き分けてより眠られず  
径の辺の誰も気付かぬ霧余子かな

# 耕 土 集

## 黒滝志麻子選



今野 明子

一尋の川面彩り緋のカンナ  
青空と燃ゆるカンナの水鏡

地図に無き里の背山の良夜かな

天高し女子ゴルファーの脚線美

氷川丸の汽笛どよもす末の秋

横浜 東小蘭美千代

赤蜻蛉休みの長き竿の先  
行き合ひて袖すり合ふや萩こぼる

月光の雅楽に乗りて広ごりぬ

蘆の穂の流転始めの川面かな

古びたる火の見櫓やカンナ燃ゆ

佐藤 喬風

秋の神輿囃子程には練りもせず  
敬老日身辺りの老いばかりなり  
子叱りし反省今も秋茗荷  
色少なき古刹の庫裡に酔芙蓉  
茎長き秋の七草風を呼び

新井八重子

土釜の粗朶のけぶりや岩魚焼く  
踊り手に渾名で呼ばれ在祭

鯉跳ぬる潮満々と鶴見川

母逝きぬ三日三晩の虫の声

ファックスの紙の絡まる文化の日

相模原 板谷 俊武

信濃路や走る目当ての走り蕎麦  
真円を空に良夜の宴かな

秋晴や数を増したる赤蜻蛉

大雨や稔りの秋を流しをり

行く秋や見ぬ間に増ゆる転居跡

宮崎他異雅

秋の海白く水脈曳く漁舟  
雲一朵描く画帳や薄原

大粒の栗じつくりと渋皮煮

一斑の影さへ見えぬ月夜かな

長き夜の妻の手元は電子辞書